



# C-SR顧問レポート 2017年 10月号 (第59号)

## [今月の担当]

C-SR(社)医療介護経営研究会顧問



**西村 栄一 氏**  
(にしむらえいいち)

株式会社ヘルプズ・アンド・カンパニー  
代表取締役  
mail : info@helpz.jp

全国の介護事業者に「法令順守経営改善」「実地指導対策」「リスクマネジメント」の支援を行っている。91年早大卒。人材派遣会社で人事マネジメントと店舗運営。米国の州立大日本語講師、ディズニーワールド衣裳店長勤務後帰国。04年コムスン入社。クレーム、債権、行政対応と後任育成に組み込み、環状関西副支社長。10年ヘルプズ&カンパニー設立。専門6誌コラム定期執筆中。



私は、2007年の自らの介護業界からの退場体験から、その重要性を警鐘し続けています。2009年10月に日本で初めて「守り」の介護運営戦略として株式会社ヘルプズ&カンパニーを創設。実地指導対策を中心に「苦情対応」「自立支援の記録」「リーダー育成」等の安全で確実な「守り経営」で300以上の実績。さらに、過去の実践「混合介護・介護保険外サービス」を主題にコンサルティングを行っています。ISO9001監査員研修修了。指導だけでなく、今年の10月より地域密着型デイサービス(株)ライフサービスの代表にも就任。誰もが自由に行き来できる環境を作る共生型の事業所に向けて実践開始です。さて、その共生型サービスのひとつとして、当社もAI(人工知能)を活用した介護のケアマネジメントの可能性に取り組んでおります。介護に関わる人は統計上、日本国内約150万人とのこと。そのうちケアマネジメントを行うケアマネジャーは全国で13万人。実際に、そのケアマネジメントを人工知能に代わってどのレベルまで期待できるのでしょうか？

【レベル1】人工知能が自動的にケアプランを作れるようケアマネジャーを支援する。

【レベル2】人工知能がケアマネジャーに代わって自動的にケアプラン(書類)を作る。

【レベル3】人工知能がケアマネジャーに代わってケアマネジメントをする。

例えば、ケアプラン作成前のアセスメントや興味・関心シートの人工知能に「いつまでも元気であり続けたい。」とデータ入力すると、「元気の定義は？」と人工知能が考えなければなりません。

人によって「元気」の基準はまばらです。WHOでも定義されている4つの元気「肉体的に病気のない身体的元気」「心の病気のない精神的元気」までは計測できても、人工知能導入によって、「仲間や家族に恵まれている自己価値が認められている社会的元気」、

「魂の叫びの霊的元気」までも計測できるのでしょうか。そこで、理想のケアマネジメントに近づけるための「人工知能でできるケアプラン」のきっかけ作りをしようと取り組みを始めた団体があります。官民ファンドの産業革新機構が設立した新会社シーディーアイ社は「人工知能を活用してケアプランを提供する」を目的として設立されました。シーディーアイ社に期待されていることは、「日本が世界で唯一勝てる分野が、介護の人工知能ではないか」と注目されている点です。日本は健康立国で、世界では類を見ないほどの「過去数十年の国民の健康データ」や、「20年近い介護のアセスメントやケアプラン」が経年で保管されている実績があります。私は、シーディーアイ社の関係筋から情報を入手し、この人工知能の機械学習機能の一つでもある『ディープラーニング』についての方向性を確認することができました。

## C-SR顧問レポート 2017年 10月号 (第59号)

シーディーアイ社は、最短で2019年4月には実装したケアプラン自動作成機を稼働させようとしています。あと半年以内のことですが、人工知能の年齢が月ごとではなく、日ごとに成長している。つまり、現時点(2017年10月)に5歳程度の知能であっても、データを入れるほどに、あと半年で6歳から10歳程度の知能進化は見込まれているそうです。

よって、先進しているアメリカの成功例と、日本での介護データの応用が計画通りに進めば、【レベル1】人工知能が自動的にケアプランを作れるようなケアマネジャーを支援する、までは可能なのではないかという結論に達することになります。

前述しましたように、ゲートキーパーとしてのケアマネの支援も合わせると、初めは人工知能とケアマネの「共存」という色が強いでしょう。

更に精度の高いものに仕上げていくために関係者が強く言うことは、そのデータの元となる「地域」が大事だということです。地域住民自身が「介護にならない、もしくはなつたとしても自立支援が大事なんだ」とこれまでの介護への考え方を変え、自立支援介護の啓発活動で地域を育てることで、より理想の高い人工知能が生まれる可能性に近づくということです。

しかし、そこまで人工知能が進化すると、心配なのは、いわゆる「悪意あるシンギュラリティ(技術的特異点)」がケアプランに起きるリスクのことです。つまり、偽装や望まないデータの習慣的なインプットをすることで、人工知能を暴走させ、間違ったケアプランを作る悪意あるリスクをどう止めるかという点です。関係者に聞いたところ、「例え、偽装データが全体の3割まで入力された場合でも、残りの7割の適合データがそのケアプランを排除修正していくようにできる。

その修正力こそが『地域力』』とのこと。地域や共生の力で協力しあって、人工知能を育てていくんだという理念に勝るものはないといえます。

人工知能に血を流し、息を吹き込んでいく。理想の自動ケアプラン作成手法を、自動翻訳機に例えるならば、英語のI love youを「私はあなたを愛します」と色気のない訳にせず、夏目漱石の『今宵は月が綺麗ですね』と訳したという逸話に通じる訳ができる、そんな寓話レベルまで進化させる。そんなケアプラン作成の支援になれるように、息を吹き込んでいきたいものです。

お問い合わせは [info@helpz.jp](mailto:info@helpz.jp)

このレポートに掲載の文章等の無断転載を禁じます  
(C-SRの会員を除く)